日米開戦60周年と記者桐生悠々

壱　岐　一　郎

要　約

21世紀、最初の年は米中枢多発テロ、炭疽菌テロで米国が揺らいだ。日本政府は英国に次ぐ武力報復協力を示した。「報復」ムードの中で1941年9月に急死した、ジャーナリスト桐生悠々（1873－1941）を回顧することは無駄ではなかろう。大阪、東京、長野、名古屋などで記者活動をした桐生は信濃毎日新聞主筆として「関東防空大演習を嗤う」を書き、退社に追い込まれ、60代の8年間、半月刊の個人誌『他山の石』を発行し続けたが、日米開戦3か月前、「廃刊の辞」を記した。「この超畜生道に堕落しつつある地球の表面より消え失せることを歓迎致し居り候うも、唯小生が理想したる戦後の一大軍粛（ママ）を見ることなくして早くもこの世を去ることは如何にも残念至極に候う」（一部、現代読みに訂正）と記した。九・一一事件の直後、米大統領は「西部劇」そして「十字軍」のように進撃をと口走った。低劣な台詞は「畜生道の地球」が決して軍縮の道を歩いていないことを示す。

キーワード：武器よりもペン、戦中ミニコミの強さ、軍拡畜生道の告発、
「武力報復を嗤（わら）え」

青年期の蓄積

桐生悠々（本名、政次）は1899年に東大法科を卒業した時が27歳、19世紀末の学制揺籃期とはいえ、晩学に近い。金沢の旧制四高の高等中学補充科から本科に進み、親友徳田秋声と作家を志して上京、1年半後、金沢に戻り復学した理由による。当時、『北国新聞』編集顧問として金沢に来た石橋忍月はよく後輩青年の面倒を見た。高等中学生桐生は創作の新聞連載を経験している。因みに石橋は後の評論家山本健吉の厳父である。また、当時の高等中学校は全国に5校のみで、1897年の京大創設まではすべて東大に進学した、1学年千人程度の超エリート集団であった。悠々の高等中学卒業時には大学予科となっていて、文芸雑誌『北辰会雑誌』が創刊され、悠々は度々寄稿している。[1] 東京の法科大学に入学すると、『日用百科全書』の一部編集を依頼されるほか、小説の掲載などに文才のきらめきを見せる。徳田秋声との再会が刺激になったことはいうまでもない。卒業前年、内田魯庵の忠告で小説から離脱していく。[2]

以後、約2年、公務員、会社員、雑誌記者の傍ら論文、小説、随筆を書いたが、1901年夏、東大法科大学院に入学し、穂積陳重教授に法理学を習い、『憲法大意』の注釈を雑誌『明義』に1年間連載している。なお、この年には『経済学の基礎』の翻訳出版もこなした。1902年、下野新聞主筆に招かれ、暮れに藤江寿々と結婚する。以後、6男5女の子宝に恵まれるが、筆禍などで生活難との苦闘を強いられる。

晩年、悠々は若い時に生活のため、英語の翻訳をしたので自信がついたと述べているが英語だけでなく、日本語の文章力も一流であった。1907年（明治40）春、『文芸新聞』は「日本文士階級鑑」を臨時増刊で発行した。大文章家と大小説家に分けられている。4大

新聞の記者の意見で番付が決められ、行司は黒岩涙香（『万朝報』）、勧進元は徳富蘇峰（『国民』）であった。つぎのようなランクは時代の流れを思わせる。

	〈大文章家〉			〈大小説家〉
	三宅雪嶺	大関		小杉天外
	矢野竜渓	関脇		徳富蘆花
	朝比奈知泉	小結		巌谷小波
1	竹越三叉	前頭筆頭		菊池幽芳
2	福本日南	前頭		－
3	末松青萍	〃	4	島崎藤村
4	陸　羯南	〃		－
5	田岡嶺雲	〃	9	泉　鏡花
6	池辺吉太郎	〃	11	徳田秋声
7	円城寺天山	〃	13	夏目漱石
8	姉崎臨風	前頭	14	国木田独歩
9	山路愛山	〃		－
10	田川大吉郎	〃	22	石橋忍月
11	大町桂月	〃	25	内田蘆庵
12	幸徳秋水	〃		－
14	堺　枯川	〃	30	田山花袋
	－	〃		－
30	内村鑑三	〃	37	木下尚江
31	与謝野鉄幹			－
32	海老名弾正	〃	57	正宗白鳥
42	安部磯雄	〃	58	永井荷風
53	桐生悠々（33歳）			－
	（117位まで）			

大小説家は6社の記者、後見、幸田露伴、行司、坪内逍遙、勧進元、広津柳浪[3]

この番付は悠々にとっては不本意でかつての同僚、後輩が小説家の方とはいえ、上位にあり、大阪にいる焦りとなったと太田雅夫は記す。[4]

とまれ、悠々が35歳までに文筆家として大きな評価を得ていたことを示す資料であるが、その基礎はどこにあったのだろうか。

まず考えられることは金沢の風土である。その時代、泉鏡花（1873－1939）、先に記した徳田秋声（1871－1943）、16歳若い室生犀星（1889－1962）らの文学者を輩出した。一方、三宅雪嶺（1860－1940）が上記の番付トップで分かるように言論界で鳴らしたほか、桐生の第四高等中学の上級生には西田幾多郎（1870－1945）、鈴木大拙（1870－1966）がいたが、「武断」一本槍の薩摩出身の校長と合わず、退学している。[5] 加賀石川は徳川の世に尚武よりも文芸、工芸という平和路線の風土が定着していたといえよう。自然科学者でも高峰譲吉（1854－1922）以下、Z項の地球物理、木村栄ら独創的な研究者を生み出していた。

悠々はこのような文化の中で育ち、かつ国際化しつつあった19世紀末の東京で文芸、言論、法律の最先端を学ぶ幸運を引き出した。最初の東京の8年は悠々にとって大きいといわねばならない。上京したすぐの頃、彼は新進作家として名をなしていた、郷里の泉鏡花の弟の家庭教師をしたり、隣県福井の芳賀矢一（国文学者）の世話にもなった。

後の長いジャーナリスト生活の土台を築くには十分な青年期の蓄積であった。しかし、彼が三宅雪嶺のように体制派言論の寵児とならなかったことにも言及しておきたい。そこには、いい意味での文学経験と、貧乏生活体験と裕福な生活の交錯が重しとして存在したからであろう。19世紀後半に見聞したものは、それまでの一向一揆の言い伝えや浄土真宗の信仰とは異質のものであった。神国、天皇の富国強兵主義はこの地方や昔からの江戸町民に異様ですらあった。[6]

後年、悠々が青年期の恩師の思い出を書いたなかに北条時敬が出てくる。北条は数学者で四高教員、校長の後、東北帝大の第2代総長を務め、1929年に没した。恩師の危篤を知った悠々は「思想訓練としての数学」をコラムに書いた（信毎、同年4, 25）。北条は「が、すべての教師と違って、在来のという

桐生悠々の生きた70年

	世　界	日　本	事　　項	年齢	メディア
1871	パリコミューン				70日刊横浜毎日
73		徴兵令	金沢に生まれる　3男		75出版条例罰則付加
79		琉球処分			朝日新聞発刊
88			第四高等中学に入学	15	自由民権運動高揚
89		憲法発布	小説家志望、徳田秋声と		
90	メーデー	総選挙	親交　92退学　93復学		教育勅語
	(シカゴ)				
95		94日清戦争	卒業、東大法科入学	23	91田中正造・足尾発言
96	オリンピック		雑文、詩歌の執筆		
99	義和団進出		東大卒業、自著出版	27	
1901			週刊雑誌編集、大学院入学		
02			下野新聞主筆　半年	30	
03			明義社入社、大阪毎日入社		平民社結成－新聞
04		日ロ戦争	小説、論文、翻訳など		05孫文ら「民報」発刊
07			大阪朝日入社　東京転勤		
10		韓国強占	信濃毎日主筆就任	38	08婦人の友　11青鞜
11	辛亥革命		中国革命のスクープ		
12		天皇没	乃木殉死批判		友愛会創立、日活創立
13			憲法擁護閥族打破記者大会		
14	世界大戦		新愛知主筆	42	
17	ロシア革命		18吉野作造民本主義批判		
20	国際連盟		18東海新聞記者大会開催		朝日、白虹事件
24		天皇没	退社、総選挙立候補、惨敗		22水平社創立
	孫文没		中京朝日発刊～半年	52	ラジオ放送開始
			翻訳出版4冊		25治安維持法
28		天皇即位式	信濃毎日復職		30新聞15社反政府宣言
33	ヒトラー政権	32満洲国	「関東防空大演習を嗤う」		五一五福日菊竹、反軍論説
			退職、名古屋へ	61	
34			「名古屋読書会－他山の石」		
35		36二・二六	「緩急車」で時局批判		
37		日中戦争	3周年号、反戦で発禁	65	福日、菊竹淳没
39	世界大戦		検閲で白紙発行が増える		
41		12日米開戦	9「廃刊の辞」、急死	68	
45	大戦終結	東京大空襲	(戦災百余箇所、沖縄戦場)		
	原爆2回	沖縄地上戦			天皇放送（玉音）
	原爆	敗戦			ＧＨＱプレスコード

よりも、教育そのものの型を破ったとすら思われる、そして実に気持のよかった先生の答案に対する採点法こそは、即ち永久に記者をして先生を忘れしめず、且つ彼の精神的生活に大感化を与えたものであった」とし、試験に代数の問題が三つ出たとすると「答えが合っていただけでは、この答案に対して満点を与えなかった。そしてたとえその中の1問題だけができていても、その解決が完全であり、順序を間違えず、理路整然として解決されていたならば、あとの2問題はできないでも、先生はこれに満点を与えることをおしまなかった」と記す。ここで悠々は結果に到達する順序に重きを措く、このことが重要だと力説する。1929年という時代を反映して、「思想の左傾的、右傾的価値の判断」においても理由と結果に到達する順序を論じることが必要だとする。その青年期に北条の謦咳に接した悠々は「思想訓練法としての数学は、思想をして、明瞭（クレア）にして、且つ明劃（ディスティンクト）ならしめる役目をもっている、という、この尊い教訓を記者は北条先生によって与えられたのである」と結んだ。

桐生悠々、絶筆のコラムは1941年9月5日、廃刊の辞直前の8年17号の「科学的新聞記者」（未発行）となったのも偶然ではなかろう。全面的な戦争3か月前、「神秘主義」を批判して、「試みに街頭に出て、民衆の言うところを聞け、彼等は殆ど挙げて今日の新聞紙を無用視しつつあるのではないか」が最後の文となった。遺言のように「科学的新聞」を力説した背景には文理の知識を基礎にした青年期の高等教育にあったと推察できよう。時代は紀元二千六百年を謳歌し、神国日本、天皇国家思想、大和魂を狂信的に加速しつつ、この文の執筆を8月末とすると、50日後には近衛内閣から軍人東条内閣へと転回し、あの日米開戦12月8日を迎える前夜であった。『他山の石』で発禁、削除などの刃をくぐり抜けた悠々が間接法で現下の新聞の役割を説いた、血の叫びにも聞こえる。

なお、もう一点、悠々が北条から学んだと思われることがある。四高開校から1902年まで金沢で教鞭を取った北条は「明治維新」の立て役者伊藤博文が各地へ出張の折、好みの芸者を同伴することに憤慨し、伊藤を掴まえて諫めたという逸話が残っている。「維新」後の伊藤や山県有朋は地位や利権に傾き「志士」などではない。北条は「維新」の日陰の地に15年住み、はっきりそのことを認識していたと見られる。(7) 悠々の反骨は金沢の風土とこのような校長の言動を受け継いでいるといえよう。思考の柔軟性、発想の多様性など管理教育、官僚主義教育以前の時代を示すものである。

帝国日本の言論強圧

悠々が『他山の石』を発行し続けた8年は日本帝国が中国東北部に兵を進め、ラストエンペラーを擁立して「満洲国」を建国して3年目であった。「関東防空大演習」論の1933年、帝国日本は国際連盟を脱退している。朝鮮半島、台湾島での皇民化はさらに激化していた。共産主義はもとより自由主義、キリスト教が圧迫された。「昭和」戦前の20年を弁護できる現代史学者はゼロに近い。「新しい歴史教科書をつくる会」の顧問、監修者のなかには中世史の専門家しかいないことに気付く。(8)

桐生悠々『他山の石』の発禁処分は別掲の通りだが、このほかに、伏せ字、削除など枚挙にいとまない。

1935年9月、陸軍省内で永田軍務局長が皇道派の相沢中佐に刺殺されたが、悠々はこの事件を3年前の五・一五にも言及してペンで鋭く告発した。

「否、否、この卑怯なる行為は、当世流行の1ギャングの仕業とも見ることができる。○○○

〇〇〇〇〇〇〇〇（引用者注、49字）ものと見ることもできる。街のギャングは、今警察当局によって一掃されんとしつつある。陸軍省内のギャングも、この機会に於いて、軍規粛正の名の下に、林陸相によって得られるならば、或は禍を転じて福となし得るかもしれない」（林は後に短命の首相、悠々と40名ほどの四高文理の同期だった。）

このような削除が帝国日本の名で行われたことを忘れてはなるまい。

また、1937年7月、本格的な大陸侵略の月のコラムに対する検閲はこうなっている。

〈日支再戦せば〉

相互睨み合っている以上、動もすれば起こり勝な〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇（170字）この〇〇〇〇（4字）年継続するものと覚悟しなければならない〇〇〇〇〇〇（354字）我が国は満洲国に於いて腹背敵を受くるの危険を覚悟しなければならない。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇（892字）そして極東の戦雲は忽にして、ヨーロッパを襲い、延いて世界天を覆うのであろう。言いかえれば、ここに第二の世界戦争が始まるかも知れない。〇〇〇〇〇〇〇〇〇（53字）〇〇〇〇〇特に近代的の戦争は、即ち次の大戦争は、ビーンストック氏が「戦争の警告」に於いて論じた如く、（前号、同氏）の「植民地再分配論」「殆ど一切の原料が戦争原料となるだろう。全国民が徴兵され、動員されるだろう。都市じゃ陸続として天に現われて、未曾有の速力を持つ飛行機の爆弾投下によって、拳を持って鶏卵を打つが如くに破壊され、非戦闘員の生命は戦闘よりも危険となるだろう。到るところに於いて－戦線に於いても、戦後に於いても、家庭に於いても、老幼を問わずして、男女児童の数十万人、恐らくは数百万人が殺され、又は不具者となるだろう」ことに想到すれば、〇〇〇〇〇（以下削除）

＊

この原稿が活字に拾われ組まれた後（7月18日）愛知県警察部長より、日支戦争に関しては一切論及することを許されず、唯政府のなすところを傍観せよというが如き趣旨の達示があったのでここに遺憾ながらこの前文を抹消する。

2000字ほどの原文の7割を削除されては文意もなにもあったものではない。特別高等警察、通称、特高の強圧は狂暴になっていく。戦後、特高の関係者で講和条約締結時に追放解除された者が3336名（岩波日本史年表、1966）というから、全国的規模の言論弾圧機構と要員が完備していたことに驚くだろう。しかも、市民の意識でこの組織と人が裁かれてはいないことを指摘しておきたい。このような言論弾圧はナチの焚書など言論封殺、ユダヤ人虐殺やソ連のスターリン体制下（以降も）の異論抹殺、自白強制、アメリカの50年代マッカーシズムの言論攻撃、中国の66－76年の文化大革命下の狂信的妄動に共通する、人類の恥部であり、権力に擦り寄った者の告発の必要を教える。不問に付すべき問題にしては大きすぎると言わねばならない。マッカーシズムについてはアメリカの隣国カナダの犠牲者、ハーバート・ノーマンについての労作が中野利子氏によって上梓されたので一読を勧めたい。[(9)]

逆に、桐生悠々のような存在は「20世紀市民栄誉賞」といった市民的な表彰運動が必要であろう。[(10)]

『他山の石』に見る言論圧迫の狂気

2001年夏は靖国、教科書をめぐって熱い夏を送った。いわゆる「つくる会」教科書は戦前の神国日本、天皇の国を美化しているが、桐生悠々の晩年10年における言論弾圧をどのように評価するのだろうか。天皇に最も近い臣下の陸海軍軍人は天皇の名で軍隊内部の

リンチを加速する一方、中国大陸で殺戮、略奪を繰り返し、国内外の憲兵は庶民を威嚇した。加えて特別高等警察（特高、敗戦時3300名余、戦後追放5年）は言論、思想の圧殺に暴走した。愛知県特高課には直接、内務省からマークするよう連絡があったこと、その反面、若い課員が桐生に同情し、ゲラの事前検閲の方が被害が少ないと助言したというエピソードが残っている。[11] その検閲の結果はつぎのように恐るべき量に達している。

発禁一覧

35,3　2−5　「広田外相の平和保障」
反戦宣伝扇動
35,11　2−19「無同情的な皇国の精神」
対外国軍の誹謗曲説
36,3　3−6　「一応は歓迎すべき広田内閣」
軍部の行動歪曲
36,4　3−7　「言論自由の再実現」
軍部の行動誹謗歪曲
36,7　3−14「広田内閣の暗礁」
軍事予算優先権の批判
36,9　3−18「我身を抓って人の痛さを知れ」
対支政策の誹謗曲説
36,11　3−21「日支親善の意義」
対支政策の誹謗曲説
37,1　4−2　「国防の充実と国民生活の安定」
出先軍部の行動歪曲
37,5　4−10「食逃解散の真相」
軍部秩序紊乱
37,5　4−10「上部軍部の劣弱性変態」
軍部秩序紊乱
37,6　4−11「治国天下の前提要件」
反戦思想醸成
37,8　4−15「善かれ悪かれ我国」
対支方針の非難歪曲
37,11　4−20「戦争の組合」
反戦思想醸成
37,11　4−20「出征兵士遺族の扶助と国家ボーナス」
反戦思想醸成
37,12　4−21「国運を賭するの意味」
我国の弱点を暴露
38,1　5−1　「日本はどれだけ強いか」
反戦思想醸成
38,3　5−6　「支那に対する我認識不足」
和平気運醸成
38,6　5−12「見逃しのきかぬ時局とその結果」
反戦思想醸成
38,8　5−16「あさましい国家とこれに巣くふ人間」
反戦思想醸成
38,9　5−18「大陸経営の内容如何」
反戦思想醸成
38,10　5−20「フォロゼラと人間」
反戦的筆致でマルクス主義紹介

愚かな政府、軍の前例

桐生悠々はその豊富な記者経験と英語力により、名古屋地区で大学関係者もかなわない英語原書、雑誌の購読を続けて、国際ニュース、国際情報を『他山の石』に収めた。

その1として、H・G・ウエルズ（1866－1946）以下、日本での有名人のハロルド・ラスキ（1893－1950）ほか多くの欧米人の評論の翻訳を掲載したことである。ウエルズは今日では過去の学者になっているが、60年代までは名著『世界の歴史』は学生の必読書であったし、そのフェビアン協会派のヒューマニズムは万人向きといえた。悠々は18回にわたって「経済機構に寄生する富豪」や「世界の新秩序」などを連載している。が、当局はこれら欧米人論文の翻訳も見逃さなかった。

1935,5　クローズ「外人の観た荒木大将と林大将」
発禁
ラスキ「国家の再検討」　発禁
1936,3　ヤング「強くして弱き日本」削除
29ページ(ニューヨークタイムズ記者)
1938,1　チェンバレン「日本はどれだけ強いか」
発禁
（『出版警察報』より太田雅夫調べ）

特別高等警察の頭は政府、軍と一体といってよい。このような判断は後世に残る「国恥的」なものではないかと思われるがどうだろうか。

『他山の石』1935～38年は年6、7回の発禁、削除を強制されている。年24回発行だから、経済ベースでも大きな被害である。

悠々は日米戦争について軍部の暴走を心配して、すでに信毎時代に陸軍中将井上一次の『日米戦争の勝敗』(1932) を紹介して「自滅」の危険を説いた (32,2,18)。米人記者ヤングの論は (世界の)「権力は米国に移りつつある」(上記) 思想を披露している。帝国日本の軍、政府による「世論」誘導の奔流のなかで悠々のミニコミはしかと言うべきことを言っている。

その2として、『他山の石』はマスコミの新聞やNHKラジオが「官報」化し、侵略を伴奏するなかで、中国の必要な情報を明確に伝えている。その際立った例は1937年12月、蘆溝橋事件の年の最終号に次ぎのような4項目を6ページにわたって掲載したことが挙げられる。以下、略記しておこう。

「抗日民族戦線と其の領袖」
国民党　国家主義青年党　人名1
　　国家社会主義党　〃 1
　元老派　汪兆銘ほか4名
　実力派　蒋介石、何応欽ら4名
　軍閥派　張学良ら4名　文治派　4名
　欧米派　宋子文、孔祥熙、宋美齢ら4名
　聯ソ派　宋慶齢ら4名
第3党　人民戦線派　郭沫若ら3名
　文治派　3名　軍閥派　3名
　共産党取り消し派　陳独秀
　留莫派（モスクワ）3名

「国民政府の西遷」1937,11,17発表
　　(引用者注、南京から重慶へ)
A　重慶に遷れるもの　国民政府主席、
　　5院長、3部長
B　漢口に遷れるもの　外交部ほか2部
C　長沙に遷れるもの　1部
D　南京に残留せるもの　大本営　蒋介石、ほか
　全国国防委員会　　委員長　〃
　　副委員長　8名　(毛沢東、朱徳)
　　作戦主任　1名　政治部長　周恩来

「中国共産党関係人名要覧」86名
(故人、転向者、周仏海らも)

「支那の陸海軍」空軍、海軍 (総艦艇約百隻)、陸軍(総兵力200万)、共産軍 (総兵力18万)
　　(『他山の石』1937, 12, 20)

なお、「中国共産党関係人名要覧」にはつぎのような補足がある。
中国共産党　1921年上海に於いて成立
中華蘇維埃共和国
　　1931年瑞金に於いて成立
　　1934年瑞金を抛棄
中華紅軍政府　陝西延安
　　軍事委員会委員長　毛沢東
　　副委員長　周恩来
　　総司令　朱　徳
　　参謀長　劉伯承

このような中国情報について、当時の朝日年鑑、毎日年鑑 (1938年版) と比較すると『他山の石』の優れた情報力がわかろう。悠々は海外から活字で入手する国際情報と自らの豊富な経験と透徹した時局批判を柱に理不尽な検閲に抵抗し、子沢山の生活苦と格闘しながら、月2回刊行の個人雑誌をライフワーク、天職としたのであった。

また、検閲との関係についてはいくつかの段階がある。

1937年11月20日、「今後の危険な箇所を〇〇〇で表わす」と言明、その21号発禁
1938年10月20日　臨時増刊号で「記者

の敗北」を声明

1938年11月20日　ゲラ刷りの事前検閲を求める。水野広徳の激励で続刊を決意

当局との息づまる対決のなかでも悠々は詩歌の筆を取った。

南京陥落　(1932,12,10～)

人をかえ主をかえなば如何ならん
　南京の人東京の人
支配者のイデオロギーにのみよりて
　民導きし報なるなら
かくまでも傷きながら唐の人
　目さめざるにや目さめたるにや

(5年2号　1938,1,20)

近　詠

高き屋にのぼりて見れば煙り立つ
　軍需工業は賑いにけり
低き野に降り立ち見れば煙なし
　民のかまどは冷たかりけり

(6年4号　1939,2,20)

冬枯れつ「わが戦」の真最中

(7年10号1940,5,20)

偶　感

人が彼を何といおうとも
　又彼が何であろうとも
十年一日の如く思い来った彼の
　事業を別に助けないでいられようか
(中略)
思うこといわずして
　腹ふくるゝが故に
二合三勺で沢山だ
　おのれが心唯一つでは
もっそうはんの切米も
　百万石にまさるとぞ

(8年16号　1941,8,20)

日米関係と悠々の警告

1939年、日本陸軍と中国以外の直接対決にノモンハン事件があるが、当時、関東軍の敗北、1万3000余名の戦死、百余名の捕虜という事実は大本営以外の者には知らされなかった。悠々はその7月に「支那事変2周年」「日支いづれが勝つか」などを書き、9月のナチスドイツのポーランド侵入に対しては「欧州戦争への我の不介入」を明言している。周知のように、「皇軍」は戦争を仕掛けるのが勇気、武士道と単純に信じ込んでいたのであり、戦後を検討するとか、勝運に恵まれないことを研究することを避けてきた。要するにやりっ放しであった。

中国大陸で泥沼の戦況にあった1941年初頭、悠々は「政府自身の臣道」と題して警告する（8年1号)。「(日中戦争）第4年の春を迎えた。軍部及び政府当局もその重大な責任を知って、速かに日支事変を終局せしめよ。これを終局せしめないで、更にアメリカと事を構ふるのは無謀の極である」と正面からペンを振るった。60代後半、発病の直前であった。欧米に遊学の経験はなかった悠々だが、さすがに見るべきものを見ていたということができる。たとえばコラム「緩急車」では女性参政権論者の悠々は「米国の国防婦人会」の題で紹介し、当時、日本で誕生した国防婦人会も「今日の束縛された状態からこれを解放しなければならない」と結んだ（3年13号1936, 7, 5)。また、グレゴリー・ビーンストックの「日露再戦せば」と「日米若し戦わば」（4年11号, 13号1937）を訳して注目を集めた。ビーンストックは開戦第1年には日本はいずれの戦争でも海陸ともに一大進出をするだろうが、2年目からは経済戦のため、その出鼻を挫かれるだろうと結論した。このリポートが書かれたのは日中戦争の開始前であったが大陸でも彼の予想通りになったと悠々は記した（標題・日支事変1周年)。

1939年11月、アメリカが日米通商条約廃棄を通告した後、野村外相とグルー米大使との会談の開始を受けて、悠々は「外相の渡米

を望む」を記した。すでに米国太平洋協会会議を『他山の石』で報告しているが「米国人にして我を理解しているのは少数有識のものであり、大半の米国人は我を以て直に侵略者と看做している。我はこの点について、大に反省しなければならない」とまで言い切った。

1940年12月、ルーズベルト3選を受けた、日本の新聞の反米潮流に対し「特に親の心子しらずの我新聞が、アメリカに対し、ルーズベルト大統領の3選に対して今日の如き悪罵を敢えてしている以上、アメリカ人の感情の悪化は、野村大使が如何に好意を以て彼等に接しようとも、この感情を翻すことは、至難でなければ、不可能でもあるだろう」と憂いを隠さない（1941年1月前掲）。

1941年7月、ソ連の参戦、対独宣戦布告により、悠々は「最終に、ソ連もまた戦争に巻き込まれた。これで名実共に『第二の世界戦争』になった。（中略）かくして人類がその愚に目ざめなければ、結局彼等は自滅しなければならない」（巻頭言8年13号）と記した。

絶筆、廃刊の辞「畜生道の地球」を書く2か月前であった。帝国日本は日米戦争への坂を転がり落ちていた。[12]

歴史は繰り返す～60年目の酷似

21世紀の初めの年、アメリカは暴力好きハリウッド映画そこのけの「同時多発テロ」に見舞われた。この用語はアメリカ発日本語訳である。ニューヨークのＷＴＣツインタワーとワシントンのペンタゴン北棟が航空機自爆テロに攻撃されたのであった。全体としてのテロは全く弁護の余地がない。金融資本主義のシンボルと共に普通の庶民3000名が犠牲になった。1945年の8・9以来の一瞬大量虐殺である。だが、子細に考察すると、ニューヨークとペンタゴンでは決定的に意味が異なることを指摘しうる。事件の2日前の9月9日、沖縄タイムス朝刊は1面に3段「米軍基地にテロの恐れ、在日米大使館警戒呼び掛け基地外も狙う？」（共同電）と報じた。その2日後の世紀の大事件であった。米国防総省はペンタゴンの犠牲者を最初800名と言い、後で180～190と訂正した。この種のデマは89年の天安門事件の犠牲者3000名で知られる（アムネスティは1000名説）。問題はＷＴＣビルについてはテロを強く非難することにやぶさかではないが、ペンタゴンについてはこれほどアメリカ、政府、軍の無能をさらけ出したものはないということで、俗語でいえば「間抜け」ということになる。事件は日米開戦5か月後の1942年4月18日のドウリエットルらの東京、名古屋、神戸などの初空襲に比較できる。まして、テロ情報を全世界に流しながら、総本山が簡単にやられてしまう、その愚かさを天下にさらしたことになる。

案の定、ブッシュ大統領は怒り狂って1週間後「十字軍のように」と言い、「西部劇のように」と演説した。側近にたしなめられ、後では言わなくなり、「西部劇」もすぐ引っ込めた。が、このくらい低劣、低級ぶりを見せた大統領も珍しい。それだけ軍中枢をやられて「頭にきた」のであろう。これ以降「武力報復」絶叫の大行進である。イギリスがすぐ応じ、日本がこれに続いた。

80％がブッシュ支持のアメリカでは連邦下院議会で女性民主党議員がただひとり、反対票を投じ、女子高校生が報復反対のＴシャツで抗議した。同じ学校で彼女を支持する高校生は6～7名いるという（11, 21「ニュース・ステーション」）。言語学者のＮ・チョムスキーらも政府の武力報復に反対である。[13]

日本では、事件後10日目に書いた立花隆「自爆テロの研究」の末尾でブッシュ大統領の発言を「ガキ大将」と決め付けていて、日本の多数派の見解と一致している。[14]

今回の大事件はアジアの西端イスラエルとパレスチナが原因である。アメリカの傲慢、独走、暴走は沖縄で見ていて明瞭である。アジアの西と東にイスラエル、日本、台湾とい

う自国に最も近い弟分を養成する軍事政策を、21世紀にまだ強引に続けている。20世紀前半の帝国日本と瓜二つである。当時の日本は批判勢力が孤立し、凶暴な権力の前にその力が弱かったといえる。

今、新しい事態に、テレビとインターネットという武器が市民の側に利用されようとしている。日本の公共放送のようにニュースがホワイトハウスと同じことを言っていると言えるようなものもあるが、やがて市民の審判を受けるだろう。悠々のいう「我新聞が、(ルーズベルトの3選に対し）悪罵を敢えてしている」警告が生きてくるだろう。

1941年の帝国日本と2001年の超大国アメリカは相手の哲学、情念を知らない点、知ろうともしない点で酷似しており、尊大さはいかんともしがたい。日本は神道をアメリカはキリスト教を持ち出しているが、共に自らに都合のいい解釈で、たとえばいくつもの残虐行為にいささかの反省もない。朝鮮半島の独立運動への弾圧や中国東北部、七三一部隊の人体実験、南京、原爆投下やベトナムを想起してみよう。しかも、日米共通の欠点は60年の時空をこえて中国に対する無知、その哲学の無視、例えば「中庸」などであろう。[15]

そもそもグローバル・スタンダードもその実はアメリカン・スタンダードでありながら90年代の10年を風靡したが、本来このようなオール・オア・ナシングの思想は東アジアやイスラム圏になじまない。まして、政治と軍事がその牽引車となったアメリカは、『他山の石』のような思想こそ必要なのではなかろうか。

ブッシュ大統領は9月11日の演説でひたすら「自由」と繰り返し、「民主主義」をひと言も叫ばなかった。彼の「自由」は「ボロ儲けの自由」「沖縄自然破壊の自由」に聞こえ、アメリカ政治敗北の遁走譜に響いたのであった。桐生悠々風にいえば、武力報復、ガキ大将を嗤(わら)え、であろう。アメリカ史の研究者袖井林二郎法政大名誉教授は「米国は悪いときに悪い指導者に当たってしまった、とのべ、「カウボーイのような人」と評した。[16] 武力報復が国際法上、問題があるのは当然である。

ノーベル平和賞がアナン事務総長と国連に贈られたのは何か暗示的である。国連本部がニューヨークにありながら米国に無視され、分担金を滞納するなど横着な米国に対して象徴的といえよう。

だが、アメリカには横暴な政府、軍批判の学者や市民はいても悠々のようなジャーナリストはまだ出ないようである。

悠々、墓碑の句である－こおろぎは鳴きつづけたり嵐の夜

註

(1) 1895～1948年刊行、第四高等学校北辰会、悠々寄稿は1～5号
(2) 太田雅夫　1987年『評伝桐生悠々』不二出版　p 33－34
(3) 太田雅夫　1987年『評伝桐生悠々』不二出版　p 56－58
(4) 太田雅夫　1987年『評伝桐生悠々』不二出版　p 59
(5) 金沢経済同友会編　2001年『石川県ってどんなとこ』講談社、ほか
(6) 清永孝　1996年『良妻賢母』中公新書
(7) 四高同窓会編　1967年『四高八十年』同窓会
(8) 西尾幹二編　2001年『新しい歴史教科書』扶桑社
(9) 中野利子　2001年『外交官E・H・ノーマン』新潮文庫
(10) 壱岐一郎　2001年『占領下メディアの軌跡』日本・マスコミューニケーション学会　発表レジュメ
(11) 前掲『評伝』5章
(12) 桐生悠々　1989年再版『畜生道の地球』中公文庫
(13) ノーム・チョムスキー・大江健三郎論文

2001, 10, 4　朝日新聞
⒁　立花隆2001年「自爆テロの研究」文藝春秋11月巻頭論文
⒂　沈昌文　2001, 11, 23「テロは地球を変えたか」（西洋の攻撃性）朝日新聞
⒃　袖井林二郎　2001, 11, 2「アメリカの「大誤算」」週刊朝日

参考文献

桐生悠々『他山の石』1～4巻　不二出版　縮刷（延べ5000ページ分）　1987年
井手孫六　1980年『抵抗の新聞人　桐生悠々』岩波新書
太田雅夫編　1991年『桐生悠々自伝』新泉社
木村栄文編著　1975年『六鼓　菊竹淳』葦書房
木村栄文編著　1997年『記者ありき』朝日新聞社
夏衍、阿部幸夫訳　1988年『ペンと戦争』東方出版社
竹山昭子　1994年『戦争と放送』社会思想社
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
映像作品（横浜、新聞博物館・放送ライブラリーで視聴の可能性）
1971, 10, 22ＮＨＫ『桐生悠々－あるジャーナリストの生涯』
ほか名古屋テレビ『歴史ウオッチング』1990年代
音声テープ企画　小著1997年『マスメディア文化の未来像』ｐ172梓書院

参考資料

旧宅　名古屋市守山区
墓所　東京・多摩墓地26区1－28
展示　金沢市広坂　石川近代文学館

謝　意

1991年の大阪以来、太田雅夫氏のご指導を受けた。心からお礼申し上げる。

Journalist Kiryū Yūyū and the 60th Anniversary of the U.S.-Japan War

Ichiro Iki

Abstract

The dawning year of the 21st Century saw the United States shaken by coordinated terrorist attacks on its major centers and anthrax bio-terrorism. The government of Japan quickly followed the United Kingdom in promising to support military retaliation. Amidst this "retaliation" mood, it is worthwhile to refresh our memories of pacifist journalist Yūyū Kiryū (1873-1941), who passed away in September 1941. A reporter who had worked in Osaka, Tokyo, Nagano and Nagoya, Kiryu wrote an editorial entitled "Laughing at the Great Kanto Air Defense Exercise" while editor-in-chief of the Shinano Mainichi Shimbun, then was forced to resign. He published the semi-monthly private journal, *Tazan no Ishi* ("Food for Thought") for eight years while in his 60's, but announced discontinuation three months before the start of the U.S.-Japan war. In his announcement of discontinuation, he noted, "While I welcome that we are disappearing from the face of an Earth about to fall into the Path of Bestiality, I yet have strong regret that we are departing without sight of the massive postwar disarmament long dreamed of." (*A portion adjusted for modern readers.*) Immediately following the 9.11 attacks, the President of the United States called for attacks by "cowboys" and "Crusaders." These cheap words show that our "Earth (on) the path of Bestiality" is not yet moving towards disarmament.

Key words: The Pen is mightier than the Sword
The Power of Mini-communication in war
Protest military expansion in the World of Bestiality
"Mock military retaliation"